令和７年度　　自己評価・学校関係者評価 報告書

学校番号	44	学校名	多治見北高等学校

社会的役割等 (ｽｸｰﾙ･ﾐｯｼｮﾝ)		国内外の幅広い分野で活躍する人材を輩出してきた高校として 校訓「自主・自律・自学」のもと、全人的な教育活動を通して 確かな学力と自ら学ぶ姿勢、豊かな人間性、地域を愛する心と広い視野を有する人材の育成を目指す学校
学校教育目標 （教育方針）		「自主・自律・自学」の校訓に基づき、社会的・職業的自立に向けた基礎となる力を育て、グローバル社会の中で貢献できる生徒の育成を目指す。
３つの方針 (ｽｸｰﾙ･ﾎﾟﾘｼｰ)	どんな生徒を育てたいか 【ＧＰ】	・ 基礎的・基本的な知識・技能を修得し、思考力・判断力・表現力及び自ら考え学ぶ意欲や態度を身につけた生徒 ・ 豊かな人間性や情操とともに、自らの行動に責任をもち主体的に判断し行動する態度や、積極的に自己を活かす能力を身につけた生徒 ・ 自己の在り方や生き方を考え、主体的に自らの進路を考える能力や態度を身につけた生徒 ・ 地域社会への理解や関心を深めるとともに、国際化に対応できる能力を身につけた生徒
	生徒をどう育てるか 【ＣＰ】	・ 生徒の興味・関心を喚起し、思考力を高める授業の推進 ・ 信頼と愛情を基盤とし、生徒理解に徹する指導の推進 ・ 将来を見据えた体系的なキャリア教育の推進 ・ 地域に存在する様々な問題の解決を目指す探究活動とその地域連携の推進
	どんな生徒を待っているか 【ＡＰ】	・ 「自主・自律・自学」を身につけ、「自分らしい生き方」へ向かって進む意欲のある生徒 ・ 本校の教育目標及びグラデュエーション・ポリシーを理解し、カリキュラム・ポリシーに沿った学習活動に、主体的に取り組む意欲のある生徒 ・ 自身の現状に満足することなく、より高い目標を設定し努力し続ける意欲のある生徒
学校の抱える課題		・グローバルな視点とローカルな視点を併せ持ち、社会に開かれた学校を目指す必要がある。 ・観点別学習状況評価についての研究をさらに進め、指導と評価の一体化を図る必要がある。 ・人間関係の構築を苦手とする生徒が増加傾向にあるため、特別活動等を通じて自己有用感を高め、良好な人間関係を築ける人格形成を目指す必要がある。
教育指導の重点	領域・分野	今　年　度　の　具　体　的　な　重　点　目　標
	学習指導	生徒の興味・関心を喚起し、思考力を高める授業を推進します。
	生徒指導	信頼と愛情を基盤とし、生徒理解に徹する指導を推進します。
	進路指導	将来を見据えた体系的なキャリア教育を推進します。
	特別活動	自主的・実践的な態度を育成するとともに、豊かな人間関係を育みます。

年　度　目　標 ／ 年　度　末　評　価（自　己　評　価）

領域 分野	３つの方針・具体的な重点目標の達成に必要な 具体的取組・方策	県教育振興 基本計画での 位置付け	達成度の判断・判断基準 あるいは評価指標	取組状況・実践内容 評価項目の達成状況等	評価 A.B.C.D	成果と課題	総合 評価 A.B.C.D
学習指導	基礎的な知識・技能の定着と発展的な学習のために指導方法・評価方法を工夫し、授業の充実に努め、観点別評価についてさらに研究を進めます。 思考力・判断力・表現力等を育てるために、少人数・習熟度別授業を展開し、生徒の個性や能力に応じた指導を充実させ学力の伸長を図ります。 言語活動の活発化やＩＣＴの積極的な活用を通して探究的な学習を進め、生徒が自ら課題を見つけ解決していく主体的な学習態度の育成を図ります。	施策Ⅱ-8 施策Ⅱ-8 施策Ⅱ-9	❶生徒による授業アンケートの分析結果 ❷各種考査などによる学力到達度の分析結果 ❸生徒による授業アンケートなどの分析結果	・新入生から細分化した評価方法を導入したことにより、学習状況をより丁寧に把握できるようになり、指導と評価の一体化が進展した。 ・少人数・習熟度別授業の実施を通して、言語活動やＩＣＴ活用を推進し、主体的な学習態度の育成にもつなげることができた。 ・ＤＸハイスクール事業や図書館講座を活用し、地域について考える機会を設けたことで、ローカルな視点を養うことができた。	B	○新たな評価方法の導入や少人数・習熟度別授業により、生徒の理解の深化と学習意欲の向上が見られた。 ▲指導方法や評価方法の教員間共有には、改善の余地がある。 ▲ＩＣＴ活用については、パワーポイントによる提示が中心であり、協働学習や個別最適化につながる活用が課題である。 ○ローカルな視点の育成には一定の成果が見られた。 ▲グローバルな視点の育成は今後さらに強化すべき課題である。	B
生徒指導	社会の一員としての自覚を深め、自律的な態度と、自他の生命を大切にして人権を尊重する態度を育てます。 いじめ・不登校・問題行動には、全職員が危機管理意識をもち、共通理解のもとに一体となって指導にあたります。 保護者や地域との連携を密にし、理解と協力を得て、三位一体となった指導を推進します。	施策Ⅰ-1 施策Ⅰ-3 施策Ⅰ-7	❶日常生活における生徒の様子の変化 ❷いじめ・迷惑調査など各種学校生活調査の分析結果 ❸生徒・保護者対象アンケートなどの分析結果	・いじめの問題や、生徒から発信されるＳＯＳの受け止め方に関する職員研修会を実施し、共通理解をもって指導にあたった。また、教職員支援機構と文科省が主催する生徒指導基幹研修へ生徒指導主事が参加し、その内容について伝達講習会を実施した。 ・いじめアンケート(年３回)と心のアンケート(年４回)を実施し、トラブルの有無や生徒の心の状態について把握した。 ・担任を中心に年２回の三者懇談だけではなく、家庭連絡等で連携を密にした。	B	○友人などを大切にしたいという意識を強く持っている生徒が多い。 ▲社会のルール、マナーを守ろうという意識がやや希薄である。様々な体験を通じて、広い視野を持って行動できる人物を育成したい。 ▲学習でのつまずきや、人間関係がうまくいかないなどのきっかけで、学校に登校できない生徒が一定数いる。 ○担任や教育相談担当、スクール相談員の尽力で教室に戻れる生徒もいるので、引き続きこの体制を継続できると良い。	
進路指導	３年間を見通し、生徒の発達段階に応じた計画的・組織的な進路指導を展開します。 生徒が希望する進路目標を実現できるよう、確かな学力を身に付けさせます。 生徒一人一人が自己の多様な能力・可能性を理解して、主体的に進路選択できるよう、学校生活の様々な場面でキャリア教育を充実させます。	施策Ⅰ-1 施策Ⅱ-8 施策Ⅱ-13	❶行事ごとのアンケート結果 ❷各種考査、外部模試などの分析結果 ❸生徒・保護者対象アンケートなどの分析結果	・３年間を見通した進路指導計画の下、生徒の発達段階に応じて講演会や三者懇談などを組織的に実施し、希望進路の実現に向けた支援を行うことができた。 ・学校評価アンケートでは、生徒・保護者の約９割が「進路情報が役立った」「将来を考える機会が十分にあった」と回答しており、計画的な取り組みが成果を上げていることがうかがえる。	B	○進路講演会やキャリア教育を通して、生徒が将来について考える機会は着実に増え、理解も徐々に深まってきている。 ▲主体的に進路選択へ踏み出す力については、十分に育ちきっていない面も見受けられる。 ○希望進路に応じた個別支援は機能している。 ▲学力向上とキャリア形成を結び付ける指導の強化、教科間連携、探究活動との一体的な取組みなど、生徒の主体性を引き出す仕組みづくりが今後の重要な課題である。	
特別活動	ホームルーム活動を通して所属意識を育むとともに、互いに切磋琢磨できる人間関係を育成します。 生徒会活動の充実を図り、学校の伝統継承するとともに、自ら主体的に創造・改善する喜びと達成感を体験させます。 部活動を通して、仲間と支え合いながら強い精神力を育み、社会生活を豊かにする人間力を醸成します。	施策Ⅰ-1 施策Ⅱ-8 施策Ⅳ-24 施策Ⅳ-25	❶生徒・保護者対象アンケートなどの分析結果 ❷生徒会行事・学校行事などの後に行われるアンケートの分析結果 ❸部活動の実績や生徒・保護者対象のアンケートの分析結果	・学校祭活動、生徒会、各種委員会、係の活動を通じて、組織の中で自身が果たすべき役割を全うできるよう指導を行った。 ・部活動へ意欲的に取り組む生徒が多いことから、部内で協力して練習や試合に励むほか、他の部活同士でも刺激しあいながら成長を促すことができた。	A	○好奇心が旺盛で何事にも意欲的に取り組むことのできる生徒が非常に多い。 ○ホームルーム活動や生徒会活動、ボランティアや部活動に至るまで充実した活動を行うことができている。 ▲一方で、周りを牽引することのできるリーダーが育っておらず、今後の課題と考える。	

来年度に向けての改善方策等　　実施日：令和８年２月３日

・１年生全員を対象に、１２月に３日間のグローバルスタディーズプログラムを実施し、英語による実践的なコミュニケーションを通して国際的な視野を広げ、多文化理解と自己理解を深めるとともに、将来に向けた思考力・表現力の育成を図る。また、授業公開週間などを活用し、指導と評価の一体化について学校全体で議論を深める。
・生徒の主体的な進路形成を促すため、探究活動と教科指導との連携を一層強化し、学びと進路を結び付けた指導を推進する。また、個々の課題に応じた面談や情報提供を充実させ、生徒が自ら考え行動できる仕組みづくりを進める。
・学校祭などの協働的なプロジェクトを通して社会性を育み、自己有用感を高め、良好な人間関係を築ける人格形成を目指す。また、多様な価値観に触れる機会を設けることで、広い視野をもって行動できる生徒を育成する。さらに、その過程でリーダーシップを発揮できる生徒の育成にも取り組む。

学校関係者評価　　実施日：令和８年２月３日

・１月末に実施したＤＸイベントは、生徒がＤＸの力を高めるとともに、多治見修道院の取り壊し計画をはじめとする地域課題に目を向ける機会となった。学力では測れない「数値に表れない力」を育成する取組みは重要であり、生徒が今後の人生において興味・関心をどのように広げていくかを考えるうえでも有意義である。今後もこのような取組みを継続していくことが望まれる。
・ローカルな視点に加えてグローバルな視点を育むことも重要である。来年度、中部地区初の試みとなるグローバルスタディーズプログラムの学年導入を契機として、国際的な視野をもって地域の現実に即して考え、行動し、発信する姿勢を育成できることを期待したい。
・生徒の主体性を育むためには、適切に自立を促し、自ら考える機会を与えることも必要である。
・生徒が多様化する中、現在の教育相談体制を継続し、引き続ききめ細やかな支援が行えるとよい。
・生徒は学校行事や部活動を通して、充実した学校生活を送っている。この良さを維持しつつ、将来の学校を担うリーダーの育成にもつなげていけるとよい。
※以上を踏まえ、学校教育目標に掲げる生徒像の実現を目指す。